

52 人類は、多くの分野で躍進が見られる歴史の転換期を生きています。福祉、教育、通信の分野で、人々の快適な生活に寄与する進歩が称賛されています。しかし、現代の大半の人々が、痛ましい結果を招く不安定な日々を送っていることを忘れてはなりません。病理は増す一方です。富んでいるといわれる国においてさえも、多くの人々の心は恐怖と絶望に覆われています。生きる喜びはしばしば失われ、思いやりを欠くゆえに暴力が増し、格差はいつそう広がっています。生きるために、そして多くの場合は、わずかばかりの尊厳をもつて生きるために、戦わなければならないのです。時代のこの変化は、科学の進歩や技術革新において、またそれらの迅速な応用をもって、自然の種々の分野において生じた、質的、量的、速度的、累積的な途方もない躍進によってもたらされました。わたしたちは、多くの場合は顔の見えない、新しいかたちの権力の源となる、知識と情報の時代に生きているのです。

### 排他的な経済

53 「殺してはならない」というおきてが人間の生命の価値を保障するための明確な制限を設けるように、今日においては「排他性と格差のある経済を拒否せよ」ともいわなければなりません。この経済は人を殺します。路上生活に追い込まれた老人が凍死してもニュースにはならず、株式市場で二ポイントの下落があれば大きく報道されることなど、あつてはならないのです。これが排他性なのです。飢えている人々がいるにもかかわらず食料が捨てられている状況を、わたしたちは許すことはできません。これが格差なのです。現代ではすべてが、強者が弱者を食い尽くすような競争社会と適者生存の原理のもとにあります。この結果として、人口の大部分が、仕事もなく、先の見通しも立たず、出口も見えない状態で、排除され、隅に追いやられるのです。そこでは、人間自身もまた使い捨てのことができる商品同様に思われています。わたしたちは「廃棄」の文化をスタートさせ、それを奨励してさえいます。もはや単なる搾取や抑圧の現象ではない、新たなことが起きています。つまり、排他性は、わたしたちが生活する社会に帰属するという根幹の部分にまで達しているため、もはや社会の底辺へ、隅へ、権利の行使できないところへと追いやられるのではなく、社会の外へと追い出されてしまうのです。排除されることは「搾取されること」ではなく、廃棄物、「余分なもの」とされることなのです。

54 この状況にあつてもまだ、経済における「トリクルダウン理論」を支持する人がいます。この理論は、自由市場によって促進されるすべての経済成長は、世の中に平等を広げ、ソシヤル・インクルージョン社会的包摂を生み出すと仮定しています。いまだまったく立証されていないこの理論は、経済的権力を掌握する人々の善意と、主流の経済システムの神話化への、大雑把で無邪気な信頼を表しています。仮定された結果が生み出されるまでの間、排除された人々は待ち続けるのです。他者を排除する生活様式を維持するために、また自己中心的な理想に陶酔するために、無関心のグローバル化が発展したのです。知らず知らずのうちに、他者の叫びに対して共感できなくなり、他者の悲劇を前にしてもはや涙を流すこともなく、他者に関心を示すこともなくなつてしまします。まるですべては他人の責任で、わたしたちには責任がないかのようなのです。繁栄の文化はわたしたちに麻酔をかけ、自分がまだ手に入れていないものが市場に出ていれば落ち着かないのに、可能性を奪われたことで先の見えない人々の生活はただの風景、自分の心を動かすことのないものとなつてしまふのです。

#### 貨幣という新しい偶像崇拜

55 こうした状況の原因の一つは、わたしたちが確立させた貨幣との関係にあります。わたしたちは、貨幣が自分たちと自分たちの社会を支配することを、素直に受け入れてしまったのです。現在の金融危機は、その根源に深刻な人間性の危機——人間性優位の否定——があることを忘れさせてしまします。わたしたちは、新しい偶像を造つてしまったのです。真に人間的な目標を欠く、貨幣崇拜と顔の見えない経済制度の独裁というかたちで、古代の金の雄牛の崇拜（出エジプト32・1—35参照）が、新しい、冷酷な姿を表しているのです。金融と経済に影響する世界的な危機は、そのシステムにおけるバランスの欠如、そしてなによりも人間らしい方向感覚の欠如、その深刻さを示しています。人間はその必要の一つにすぎないもの、すなわち消費へとおとしめられてしまったのです。

56 少数の人の利益が飛躍的に増大する一方、大多数の人はこの幸福な少数派の得る裕福さからますます遠ざけられています。こうした不均衡は、市場の絶対的な自律性と金融投機を擁護するイデオロギーに由来します。そのため、共通善を保護する責任がある国家の統制権が否定されています。目に見えない新しい専制政治が——しばしば仮想的に——成立し、そ

の法と規則とを容赦なく一方的に押しつけるのです。さらに、債務とその利息のため、国を自国の実体経済から、また市民を実際の購買力から引き離します。こうしたことすべてに加えて、世界規模に及ぶ汚職の蔓延と利己的な脱税もあります。権力欲と所有欲には際限がありません。利益増大のためにすべてを食い尽くすこのシステムにおいては、自然環境のような傷つきやすいものはすべて、神格化され絶対法則へと変換された市場利益の前に無防備なのです。

### 奉仕せずに支配する貨幣

57 このような態度の背後には、倫理の拒否と神の否定が潜んでいます。倫理は、ある種の悔りとあざけりをもって考えられています。倫理は貨幣と権力を相対化するので、非生産的で、あまりにも人間的すぎると思われています。倫理は脅威であるとみなされています。人間を操作することや人間らしさを奪うことを断罪するからです。要するに倫理は、市場論理の外での責任ある返事を待つ、神なるものを指し示すのです。市場論理を絶対化する立場から見れば、神は、制御も操作もできない、危険なものですらあります。神は人間に完全な自己実現と、あらゆる隷属状態からの自立を望むからです。倫理——イデオロギー化されていない倫理——は、バランスと、より人間的な社会秩序を生み出します。この意味で、わたしは金融の専門家と諸国の政治指導者に、古代の賢者の次のことばについて考えるよう勧めます。「自分の財を貧しい人々と分かち合わなければ、彼らの財と生命を奪うことになる。これらの財はわたしたちのものではなく、貧しい人々の所有なのである」<sup>55</sup>。

58 倫理をないがしろにしない金融制度改革は、政治指導者側の姿勢の力強い変更を要求します。わたしが政治指導者に勧めるのは、決意と先見性をもって、そして当然ながらそれぞれこの状況の特殊性を無視することなく、この課題と向き合うことです。貨幣は奉仕するものであって、支配するものではありません。教皇は、富んだ人も貧しい人も、皆を愛していますが、キリストの名において、富裕な人に次のことを思い起こさせる義務を負っています。それは、富む者は貧しい者を助け、敬い、励まさなければならぬということです。わたしは強く求めます。私心なき連帯を実現し、人間のために、経済や金融に倫理を取り戻しましょう。

## 暴力を生む格差

59 現在、多くの方面で、さらなる安全が求められています。しかし、社会や人々の間での排除と格差とが取り除かれないうかぎり、暴力を根絶することは不可能でしょう。暴力は貧しい人々や貧困層のせいだと非難されていますが、機会の不均等は、さまざまな攻撃や戦争の温床となり、遅かれ早かれ爆発を引き起こします。地域社会、国、国際社会が、自身の一部である隅に置かれた人々を見捨てるのなら、どのような政策も執行機関や諜報機関も、安寧を継続的に保障することはできません。これは、排除される人々の暴力的な反応を格差が引き起こすことだけにではなく、社会システムと経済システムがもともと不正だということに起因するのです。善がおのずから広まる傾向にあるのと同様、悪への同意、すなわち不正は、有害な力を拡大し、どんなに堅固に見える政治社会システムであっても、それをひそかに根底から覆すのです。あらゆる行為に結果があるならば、社会構造の中に巣食う悪は、つねに破壊と死をもたらす力を含んでいます。不正な社会構造において結晶した悪に、よりよい未来を期待することはできません。わたしたちはいわゆる「歴史の終焉」から程遠いところにあります。継続的で平和的な開発の条件は、まだ十分に現れても実現されてもいないからです。

60 現代経済のメカニズムは消費の増進を促進しますが、格差と結ばれ抑えの効かない消費主義は、二重の損害を社会に与えます。このようにして、格差は遅かれ早かれ暴力を生み出し、軍備拡張競争は今も解決されず、これまでも解決されたことはありません。軍備拡張競争は、より堅固な安全保障を要求する人を欺くために役に立ちます。周知のとおり、武器と暴力による鎮圧は問題を解決するどころか、新たにいつそうひどい紛争を引き起こしてしまします。貧しい人々や貧しい国々が負う損害は彼ら自身に非があるのだと、不適當な一般論を好んで主張する人もいます。彼らは、貧しい人々を安心させ、手なづけ、攻撃的にならないように変える「教育」に解決があるといっています。しかし、排除された人々が多くの国々に巣食う社会的な癌である汚職——政府であれ企業や組織であれ——の蔓延を知ったなら、統治者の政治的イデオロギーがいかなるものであれ、その反感はますます高まることでしよう。